

ぽたい!

源流のひとしづく

ぽたい

源流のひとしづく

冬
第16号

ぽたい 源流のひとしづく 第16号 発行日 平成21年1月発行
発行所 財団法人吉野川紀の川源流物語 森と水の源流館

TEL 0746・52・0888

CONTENTS

- ・巨樹古木珍樹調査にあたって
- ・調査速報
- ・川上七木
- ・吉野杉と杣人の独り言
- ・コラム
- ・吉野林業の父 土倉庄三郎

森と水の源流館

住所 奈良県吉野郡川上村宮の平
財団法人吉野川紀の川源流物語
TEL 0746・52・0888
FAX 0746・52・0388
URL <http://www.genryuu.or.jp>
E-mail morimizu@genryuu.or.jp

じりょう
川上村のめざぐらしい木
「ビヤクシン」(ニハクイブキ)
木村全邦



ビヤクシン (学名: *Juniperus chinensis*)
ユニベルス キネンシス

は庭園などでよく見かけられる木で、昔から日本人に庭木として親しまれてきた木です。そういうわけで、存在自体はめずらしくないのですが、自然分布で自生しているのは、普通、海岸付近に限られています。有名なものには静岡県沼津市大瀬崎ビヤクシン樹林などがあります。京都大学に収蔵されている標本情報をまとめた村田(2004)によると、近畿地方では兵庫県家島、生島、和歌山県友ヶ島、瀬戸鉛山村、黒島、江須崎に分布し、奈良県でも大峰山に記録があることになっていました。この大峰山の記録がこれまでのところ日本で唯一の内陸分布でしたが、最近では確認されていません。ところが、最近、川上村でもこのビヤクシンが自然分布していることがわかりました。産地情報は保護の観点から省きます。



ますが、最近出版された「大切にしたい奈良県の野生動物植物奈良県版レッドデータブック」(奈良県、2008)にもこの川上村産のビヤクシンが引用され、絶滅寸全種としてカ

テゴリーされています。ビヤクシンが普通見られる海岸線は常に塩分の影響を受ける環境です。しかしながら、塩分は多くの植物にとって生育のさまたげとなるものです。そのため、海岸の植物たちは内陸の条件のよい場所での植物たちとの陣取り合戦に負けたものが適応したものという考えもあります。内陸に見つかった川上村のビヤクシンを調べることは、ほとんどのビヤクシン自生地が海岸線に限られている、あるいは追いやられていることを解き明かすカギになるかもしれません。どんなミステリーが隠されているのか楽しみです。そんな川上村のビヤクシンも自生ではわずか30本ほどです。大切に守っていききたいと思います。

【引用文献】
村田源・2004. 近畿地方植物誌・257pp. 大阪自然史センター。
奈良県・2008. 大切にしたい奈良県の野生動物植物 奈良県版レッドデータブック 植物・昆虫類編 - 維管束植物、植物群落、昆虫類 - 427pp.+8pl. 奈良県農林部森林保全課。

吉野林業の父 土倉庄三郎



吉野林業の父と呼ばれる土倉庄三郎氏は、天保11年(1840年)に川上村大滝の山林地主の家生まれ、現に力を入れ、現在の吉野林業の特色である密植・多間伐・長伐期、その礎となる「土倉式造林法」を生み出しました。そして、地元吉野だけではなく、全国各地、さらには台湾へと技術を広め、成果をあげていきました。また、借地林業や村外地主の森林所有者による経営、これに伴う山守制度(管理)などの基礎も築きました。

土倉翁は、事業の傍ら、道路の整備や吉野川の改修など公共事業の推進や日本赤十字への寄付など社会貢献にも努めました。私費によって小学校を開校した他、同志社大学や日本女子大学の創立にも一役かっています。板垣退助の洋行を援助するなど自由民権運動にも力を注ぐなど、林業以外の分野でも貢献しています。



生前の功績を記念して、土倉翁が亡くなった後の大正十年(一九二一年)、東京帝国大学の農学博士本多静六が中心になって広く募金呼びかけ、川上村大滝の鐘掛岩に「土倉翁造林頌徳記念」の文字が刻印された碑が建立されました。高さは23.6m、一文字の大きさが約1.8m四方あります。

《参考文献》
土倉祥子 1966. 評伝土倉庄三郎。朝日テレビニュース社出版局。
奈良県川上村ホームページ。
<http://www.wll.kawakami.nara.jp/>

源流人募集

募金は次のような活動にあてられます

- 吉野川・紀の川の水について学ぶ副読本を作成し、流域の小学4年生に配布
- 「源流学の森づくり」事業
- 「水源地の森」の保全を呼びかけるための啓発用看板の製作と設置

郵便振替 00950-2-331164 「水源地の森守募金」あて

源流人募集

源流人とはかけがえのない水を生かす源流の自然を愛し、源流を守り、育てる人です。

源流人会とは集い、話し、遊び、学び、考え、触れ、交流し、参加し、喜びを分かち合いながら、源流を守り育ててゆこうとする会です。

ともにも源流学を楽しみ学ぶ仲間を紹介ください

年会費	個人	2,000円
	家族	3,000円
	学生	1,500円
	団体	10,000円

郵便振替 00940-1-331163

巨樹古木珍樹調査にあたって

森と水の源流館 館長 辻谷 達雄

川上村の巨樹古木は数百年にわたって豊かな自然環境の中で生育し、その間、人間と共生してきました。それ故、巨樹古木は、その地域の自然との共生なしには生きてゆけません。自然を無視しては生存しえません。

巨樹や古木を見るとき、私は畏敬の念を抱き、また元気をもらいます。巨樹古木には神が宿ると信じています。少なくとも巨樹たちがもつ歴史やシンボリックな意味を広く伝えていくことの必要性があります。このような思いから、今回調査をしました。村史等でも紹介されていますが、かつての調査からみると、すでに無くなっている木もかなりあります。また、新しく発見された木もあり、今後10年に一度は見直し、これから貴重な巨樹たちの保存に努めると共に、次世代へ引き継ぎたいと思います。

村内の地域で巨樹古木珍樹が見つかりましたら、森と水の源流館へご連絡いただければ幸いです。ご協力よろしくお願ひ申し上げます。

川上村

森と水の源流館



▲ 主伐



▲ 間伐



▲ ヘリ集材



▲ ヒノキ切り口

山に植えられた苗木はその後5年余り、成長を助けるために下草刈りをする。最初の3年間は、毎年2回刈る。4年目、5年目は土用刈りといって、一年中で一番暑い土用に刈る。日陰のない炎天下の下草刈りは山仕事の中でも一番残酷極まりない過酷な仕事である。この時期が過ぎると苗木も2mぐらいに成長して、下草に負けないようになってくる。一方人間の子供もこの年代になると、大きくなり、小学校へ通っている。

山では下草刈りも終わり、蔓切りや下枝落としの手入れをし、風通しを良くし、病虫害を防ぐ。この頃になると、植栽して12年目くらいになり、木の高さも7〜8mくらいに成長してくる。子供達も元気に小学校を卒業し、中学生になる。

次は植栽木と競争するように雑木が茂ってきて、木の成長を妨げてくるので、除伐といって、雑木を切り払う手入れをする。同時に、枝払いもする。この時期が過ぎると、木々もだんだんと人の手を借りず、ひとりで大きくなっていく。その頃、子供達は中学校を卒業し、高校生になり、だんだん親から離れていく年代になっていく。

その後は間伐を繰り返すのみとなり、年代も25年生くらいになり、自然環境の影響を受けて生き続け、子孫を残し、最後は人の手によって伐採されたり、一方では台風や山火事等の災害に見舞われて倒れたりして、その木の一生が終わるのである。こうしてみると、木と人は生きる年代に長い短いはあるにせよ、木の一生と人の一生には共通するところがたくさんあることに気づく。

しかし、人間の寿命はせいぜい長生きしても100歳くらいであるが、それに比べて木は何百年も生き続け、人間の営みに与えてくれる恵みは計りしれないものがある。60年山とかかわってきて、改めて木を育て

ることの大切さを痛感している。木は言葉がしゃべらんが、長い歴史を蓄えて生きていることに気づかなあかんや。

最後に一言、吉野林業の500年は古い歴史と伝統によって培われた吉野の杣人の林業技術によって、ブランド吉野材が生産されてきた。吉野材の特色は、通直完満、本末同大、年輪幅の均一、材色が淡紅色、独特な芳香である。みんな覚えてといてや。

【用語解説】



杣人 山林で樹木を植え付け育て、伐ることを業とする人。

床替え

苗床で育てられた苗木の根系の発達を促して健康な苗木を仕立てるため、別の苗床に植え替えること。

蔓切り

造林木に巻きついた蔓類を取り除くこと。

通直

木目などがまっすぐに通っていること。

完満

木の幹が丸く均一に太く、節がないこと。

本末同大

材の根元から上部までの太さが同じであること。



わしは、400年前に川上村の下多古で生まれて育った吉野杉である。わしは吉野杉の祖先は屋久杉とか春日杉だとか云われているが、定かるところは分からない。川上村のお宮さんで立っているわしよりでかい吉野杉を見かけるが、人が植えたスギか、天然スギかということも定かではない。わしらの仲間の吉野杉の歴史は遠く古く、500年前頃から人の手によって育てられていたようだ。今のところ、川上村の人工林の中ではわしが一番年長である。わしの育ての親は御所市の中野利三門さんであったが、平成7年に川上村に売り渡されたので、現在わしは川上村に籍を置いている。長生きをしてきたので、村で「歴史の証人」という名前をつけてもらった。身の丈は54mで、胸周りは5.15mあり、すこぶる元気で生きている。あと何百年生きら



▲ 下多古村有林 (歴史の証人)

れるか楽しみである。川上村では今もわしの後輩で、300歳や250歳の吉野杉がたくさん育っている。ブランドと言われる吉野杉を60年間育ててきたオッサンの苦勞話を聞いてやってくれにや。

長年山造りをしてきて、木を育てて行くことは人間が子供を産んで育てる過程と同じだということがよく解った。それはどういうことかというとうと、百年育った木も千年生きた木も、元はといえば、一粒の種から始まっている。母樹から採取した種を畑に蒔いて、発芽した苗木を草取りや床替えという手入れを、3年間して、そして山に植える。これが山造りの始まりである。人間だと、子供の産後、親の手元で愛情を持って育てられ、やがて保育園や幼稚園に行く時期であり、共同生活の始まりでもある。



▲ 地ごしらえ



▲ 植え付け



▲ 苗床



▲ 枝打ち



▲ 下草刈り

調査速報

調査対象

- ① 胸高(1.2m)で周囲3m以上のもの
ただし、スギ、ヒノキについては4m以上のもの
- ② シンボルのなもの
- ③ 学術上貴重なもの

調査方法

周囲(胸高(1.2m)の幹周りを測定)
樹高 目測

粉尾

場所 十二社神社
樹種 ウラジロガシ
周囲 4.60m 樹高 20m



国道169号線白川渡のバス停より吉野川を渡り、中奥川に沿って徒歩約15分、粉尾の十二社神社に着く。集落より少し離れた場所、スギやヒノキの林の中にある。道路に面しているのにお参りするには便利の良い神社である。神社の裏の社叢は、奈良県の天然記念物に指定されており、その中の1つであるウラジロガシも川上村では数少ない巨樹である。

場所 十二社神社
樹種 スギ(2本)
① 周囲 5.03m 樹高 3040m
② 周囲 4.78m 樹高 3040m



同じ粉尾の十二社神社の境内に、一際目立って高くそびえて見えるスギの巨樹が3本ある。そのうちの太いスギであるか?定かではない。

場所 十二社神社
樹種 カゴノキ
周囲 2.40m 樹高 16m



同じ粉尾の十二社神社の社務所とトイレの間に立っているカゴノキである。この木は成長すると樹皮が小判状に剥がれて鹿子模様になるためこの名が付けられた。幹の肌の特徴があるためすぐに目につく。8月に開花し、実は翌年の7月頃に赤く成熟する。

中奥

場所 来迎寺
樹種 ケヤキ
周囲 4.58m 樹高 25m



国道169号線白川渡のバス停より吉野川を渡ってしばらく県道の中奥川に沿って行くと、粉尾の集落に至る。粉尾を通り抜け、更に上流に向け車で10分余り走ると、中奥集落の入口に着く。そこから林道が2本に分岐している。左の方の途中に5分ほど上ると中奥集落の中程に至る。最初の分岐を右の方へ少し上ると終点に来迎寺がある。今は無住職の古い寺である。庫裏の下にケヤキがあり、中奥集落を見守るように立っている。歴史の古さを感じさせるケヤキである。

瀬戸

場所 大塔宮神社
樹種 スギ(3本)
① 周囲 4.78m 樹高 45m
② 周囲 4.60m 樹高 45m
③ 周囲 4.20m 樹高 45m



中奥川に沿って上っていくと、粉尾、中奥、瀬戸と3つの集落が点在している。昔からこの地域を中奥谷と呼んできた。この中奥谷の一番奥の集落が瀬戸である。入口から12kmほどある。今から30年ほど前には小学校があったが、現在は限界集落である。瀬戸集落から更に2km余り上流に向けて行った所に、川に砂防堰堤があり、林道側にミズナラが立っている。そこから左手の山道を15分余り登ると大塔宮神社が木立の中に建っている。昔は人が住んでいたと思われる、石垣の積んである平らな場所がいくつも見られる。周囲には、たくさんの巨樹が立っている。村の人は昔から、「オトサン(大塔さん)」と呼んでいる。境内にはスギの巨樹がたくさんそびえ立っている中の3本を調査した。

場所 大塔宮神社
樹種 モミ(3本)
① 周囲 4.08m 樹高 23m
② 周囲 4.01m 樹高 30m
③ 周囲 3.07m 樹高 23m



本殿より下方30mくらいの山中が針広葉樹帯になっており、その周辺は人工林である。モミの巨樹3本を調査した。モミの木は村内でも多く見られる。自然林の構成樹でもあり、低地から標高1,300mあたりまで分布している。用途はたくさんあるが、昔は、棺はモミ

モミ (マツ科)

Abies firma

日本特産の常緑針葉樹で、大きいものは高さ40m、直径2mになる。若木の樹冠は円錐形だが、老木になると広卵状円錐形になる。若枝には灰黒褐色の軟毛がある。葉は長さ2-3.5cmで、若木の葉は先が深く2裂する。5月頃開花する。

雄花は黄緑色。雌花は緑色。球果は長さ10-15cmの大型の円柱形で、はじめ緑色、10月頃に成熟すると灰褐色になる。苞鱗は長く、種鱗の間から尾状につきでる。

川上村では低地から約1,300mの標高まで広く分布している。

モミというクリスマス・ツリーを思い浮かべる人も多いはず。ヨーロッパでモミといえば、日本にあるこのモミではなくヨーロッパモミ(学名:*Abies alba*)のことであり、日本のモミとは異なる。このヨーロッパモミもクリスマス・ツリーとされるが、むしろトウヒの仲間のドイツウヒ(学名:*Picea abies*)を使うことが多い。クリスマス・ツリー発祥のドイツで、クリスマス・ツリーの風習自体がはじまったのは15世紀のことである。しかし、ドイツ全体に広まったのは、19世紀に入ってからに過ぎず、最近でははじまった風習とも言える。



日本でモミがクリスマス・ツリーとされるのはドイツウヒの学名の種小名 *abies* がモミの属名と同じであったため、間違えて広められたという説がある。

文学者が翻訳するとき生き物の学名を誤って訳すことは特にめずらしいことではない。そもそもリンネウスによって、生物の名前を学名で表して分類し区別するようになったのは18世紀のことであり、それ以前には他人のそら似のようなものでも同じ仲間として区別されていて、それほど問題も起こらなかった。例えば、イルカは海を泳いでいるので魚の仲間といった具合である。現在でもスギは英語で cedar と言うが、これはヒマラヤスギやシバノスギの仲間 *Cedrus* 属を表し、マツ科のまっすぐな木の総称で、日本のスギとは縁遠いものである。それでも、学術的には、特に問題は生じていないのである。

モミもトウヒも大体の樹形は似ているし、区別できる人も少ない。そのため、日本でモミをクリスマス・ツリーとして特に困ることもないので、そのまま通用しているようである。



ツガ (マツ科)

Tsuga sieboldii



普通高さ20-25mになるが、大木では高さ40m、直径1.5mに達するものがあり、傘状円錐形の樹冠になる。樹皮は赤褐色または灰褐色で、不規則に深く裂けて落ちる。葉は長さ7-25mmの線形で大小がある。裏面に白い気孔線が2個ある。花は2月頃開く。雄花は長卵形。雌花は紫色。球果は長さ2-3cmの楕円状卵形で、はじめは緑色、10月頃成熟すると光沢のある淡褐色になり、湾曲した柄の先につく。種鱗はほぼ円形。種子は小さく、翼がある。

材は、淡褐色の色調が上品なので、長押、鴨居、柱など建築用材として特に関西では好まれている。



ツガの木もモミの木と同じく村内あちからこちで生育しているマツ科の植物である。別名をトガという。川上村では昔



場所 大塔宮神社
樹種 ツガ
樹高 304m

ツガの巨樹が1本あったので調査した。ツガは温帯の夏緑樹の代表的な樹種である。標高800~1,000mぐらゐの奥地に群生し、発達しているが、大塔さんのような里山で、しかも単木で生育している巨樹は珍しい。



場所 大塔宮神社
樹種 ツガ
樹高 3269m

と決まっていた。材は芯まで白いきれいなものが取れる。現在はクリスマスツリーで名前が知られている。



場所 清谷神社
樹種 スギ(3本)
樹高 632m
樹高 470m
樹高 544m

神之谷

広葉樹の代表的樹種でコナラと並んで用途の広い木である。大塔さんの参道のは山の動物たちにとっては貴重な食べ物である。



場所 大塔宮神社
樹種 ミズナラ
樹高 300m
樹高 18m

からトガと呼んでいる。用途は建築材。ツガの柱ともなると高価である。

清谷神社の裏に後南朝の南帝王、自天王的の弟、忠義王の行宮跡があり、村の史跡になっている。参道を川に下りた近くにケヤキがあり、川に向け斜めにそびえている。



場所 清谷神社
樹種 ケヤキ
樹高 318m
樹高 22m

神之谷の集落は、吉野川の右岸に位置しており、金剛寺をはさんで、上の集落モドロキ(戻木)と下の集落マIBA(舞場)に分かれている。国道169号線北和のバス停より吉野川を渡って右折し、坂道を上っていく林道は一本道で迷うことはない。北和道の集落の上、旧川上東小学校を真下に見て、中腹を走り、右対岸の柏木集落を見て、金剛寺の上を通り、モドロキの峠(ヒボノ)より神之谷川へ降りていく。川を渡り、車で10分あまり走ると、川右側に清谷神社がある。神社本殿の右側にあるスギは、村のベスト3に入る大きなスギである。神之谷川より20m余り神社に上る参道右側に大きなスギが4本立っている。全部で8本あるスギのうち、周囲4m以上のもの3本を調査する。



場所 金剛寺
樹種 カゴノキ
樹高 234m
樹高 18m

神之谷集落の真ん中に金剛寺がある。金剛寺は後南朝の歴史に深く関わる寺で、役行者の開基といわれている。金剛寺は長祿元年(1547年)に起きた後南朝の長子、尊秀王(自天王)にまつわる歴史の寺であり、現在も自天王の命日には当時の郷土の子孫によって朝拝式が行われている。昔は吉野川を渡って下から歩いてきたが、現在は車で庫裏まで行ける。釣鐘堂の前にはケヤキは大きく、奈良の巨樹にも数えられる。高台にあるため、永年の風雪に耐えきれず破損が激しく、内部に大きな空洞ができていた。他にも大きなケヤキが3本あり、調査した。



場所 金剛寺
樹種 ケヤキ(4本)
樹高 650m
樹高 429m
樹高 407m
樹高 330m
樹高 303m
樹高 303m

【参考文献】

- 林弥平(編) 2001. 山溪カラー名鑑 日本の樹木. 山と溪谷社, 東京.
- 堀田満・緒方健・新田あや・星川清親・柳宗民・山崎耕宇(編), 1989. 世界有用植物辞典. 1505pp. 平凡社, 東京.
- 環境庁(編), 2000. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 8 植物(維管束植物). 664pp. 財団法人自然環境研究センター, 東京.



場所 金剛寺
樹種 ウラジロガシ (2本)
①周囲 3.4 m 樹高 3030 m
②周囲 3.13 m 樹高

自天王と忠義王のお墓がある。その上の方にトチノキがある。周辺は広葉樹帯となつていて、トチノキは水分の多い川辺に多く生育している植物であるのにな、このような場所にあるのは珍しい。先人たちが飢饉に備えて植えたものと考えられる。



場所 金剛寺
樹種 トチノキ
周囲 2.93 m 樹高 18 m

自天王が身につけられていた刀や鎧などを祀った宝物殿があり、その裏にカゴノキが立っている。村内では、大きなカゴノキは数少ない。

アカマツ (マツ科)

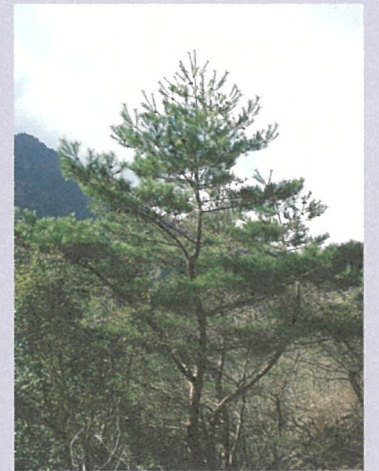
Pinus densiflora

山野にごく普通に見られ、木肌が赤いことからアカマツと呼ばれる。植林も盛んに行われている。土壌の乾燥などの悪条件に強いので、尾根、荒地などでよく植林され、そのような場所ではしばしば純林をなす。つまり、

アカマツ林が増えるのは、それだけ土地がやせていることを意味する。

幹は直立するか、やや曲がり、高さ 30-35m になるが、大きいものでは高さ 50m、直径 2.5m に達するものがある。樹皮は赤褐色または黄赤褐色で、幹の下部は暗赤色。若木の樹皮は浅く、老木になると厚く亀甲状に裂ける。冬芽は赤褐色のそりかえった鱗片に包まれている。枝は若木では輪生し、円錐状の樹形になるが、老木の枝は水平にはりだして傘形の樹冠になる。葉は 2 個ずつつき、長さ 7-12cm の針状でやわらかく、基部は膜状の褐色のさやにおおわれている。いわゆる二葉松の代表であり、子どもの頃、松葉相撲を取られた記憶のあるかたも多いことと思う。葉の横断面は半円形。4 月頃開花する。雄花は若枝の下部に多数つき、長さ約 1cm の円柱形で緑黄褐色を帯びる。雌花は紅紫色で若枝の先端に 2~3 個つく。球果は 10 月頃成熟し、長さ 3-5cm の卵状円錐形で、淡黄褐色。種子は長さ約 5mm の倒卵形。翼は種子の長さの約 3 倍で被針形。

最近では、松枯れ病が問題になっているが、これは長さ数 mm のマツノザイセンチュウというセンチュウの一種が原因と言われており、カミキリムシの一種、マツノマダラカミキリが運び屋の役割を果たしている。マツノザイセンチュウはアメリカからの帰化動物であると推定されている。このセンチュウの古里であるアメリカでは、弱ったマツを枯らす程度で問題にならないが、日本のマツはこのセンチュウに対して抵抗力が弱く、強い病原性を発揮している。



場所 大泉寺
樹種 ヤマザクラ
周囲 4.05 m 樹高 16 m

国道169号線北和田口のバス停より2km上多古川に沿って林道を行くと、上谷川と上多古川の分岐に至る。左に曲がって上谷川に沿って2kmほど上って行くと、上谷集落の入口にある久久能智神社という珍しく変わった名前の神社に至り、すぐそばに大泉寺がある。そこには珍しいビヤクシンがある。まさに珍樹である。村の人は、シンパクと呼んでいる。木で、盆栽などに植えられている。海岸の近くや高い崖などに生育する木とされている。寺の庭に生えているのは珍しいもので、昔、誰かが山から持ち出し植えたものと思われる。おそらく村では唯一のビヤクシンの巨樹である。



場所 大泉寺
樹種 ビヤクシン (イブキ)
胸高直径 3.00 m 樹高 13 m

トチノキの近くにある。ウラジロガシは葉の裏が白いのでこの名前が付いた。村内でもたくさんあるが、大きいものは数少ない。

久久能智神社の鳥居をくぐって参道を30mほど行くと神社の前にある。本殿の中に立っている一本杉の巨樹である。上谷の集落も高齢化し、限界集落になっている。年配の方が8人しか住んでいない。

※表紙の写真

場所 久久能智神社
樹種 スギ
周囲 4.47 m 樹高 50 m

ヤマザクラと並んでイロハモミジの巨樹がある。秋には両方の紅葉が楽しめる。



場所 大泉寺
樹種 イロハモミジ
周囲 2.29 m 樹高 12 m

ビヤクシンの近くにあるヤマザクラは珍しく大きいもので、1m余り上から二股に分かれて幹が2本になっている。春の花の頃が楽しみである。



コウヤマキ (スギ科)

Sciadopitys verticillata

日本特産種で、大きいものは高さ 40m、直径 1.5m になり、樹冠は狭円錐形。樹皮はやや灰色をおびた褐色で、長い薄片となつてはがれる。長枝には褐色の鱗片葉が螺旋状につき、短枝には 2 個の葉が合着した長さ 6-13cm の線形の葉が多数輪生する。花は 4 月頃開く。球果は長さ 8-13cm の楕円状円柱形で翌年の 10 月ころ成熟する。しばしば球果の先に葉がでる。

陰樹(光りに対する要求が少ない樹木で、最終的には陽樹より有利で、生育地を独占できる)であり、属名の学名 *Sciadopitys* の *Scia* は「陰」や「暗い」ことをあらわすギリシア語である。また、透水性のよい土壌を好み各地に純林ができています。特に高野山ではこの純林を霊木として保護し、切枝を仏前に供えたり、高野詣の土産にしたりしている。

材は水に強いので、昔から風呂桶に用いた。木棺としても用いられ、近畿地方の古墳から出土する木棺はこの材を用いたものが非常に多いという。



昔の東熊野街道のすぐ上に大きなトチノキがある。この木は人家の近くにある。個人所有のトチノキである。近くには天誅組の歴史に縁の橋将監の墓や天誅窟がある。



場所 個人所有
樹種 トチノキ
周囲 5.00 m 樹高 20 m

川上村の一番東、上北山村との村境に近い集落が伯母谷である。伯母谷は東熊野街道で大勢の人が往来した所であり、小学校もあつたが、現在は限界集落になつている。集落の一番高いところに法昌寺と、近くに十二社神社がある。その近くに大きなイチョウの木がある。一部枝を落としてあるので姿はよくないが、大きなイチョウの木である。



場所 法昌寺
樹種 イチョウ
周囲 4.05 m 樹高 18 m

伯母谷



川上七本

川上の豊かな自然と森と水の恵みを守り、次世代に手渡したい、こんな思いから森と水の源流館では、いろいろな取り組みを行っています。この取り組みを総称して源流学と称しています。

源流学とは、源流を通して、人と自然の役割について考えていこうということです。源流の自然、環境、生き物の生活等、源流について様々なことを知るために行動し、その体験の中から、一人一人がそれぞれの答えを見出そうとするところに源流学があるのです。

原生林である「吉野川源流―水源地の森」と日本の三大美林といわれている人工林も含めて、村全体が水源地の森であることを強調し、「川上七木（かわかみしちぼく）」を紹介しています。「川上七木」とは聞き慣れない言葉です。それもそのはず、昨年のクリスマスツリーと今年の門松に森と水の源流館で立てた七本の常緑針葉樹のことです。スギ、ヒノキ、トガサワラ、モミ、ツガ、マツ、コウヤマキを「川上七木」と名付けました。

村の森林では、ほかにもたくさん木の樹がありますが、特に大勢の人になじみの七本を選んで「川上七木」として提唱しました。その根底には水源地の村づくりと、川上宣言があり、森と水を守ることへの思いが、「川上七木」に込められています。広く大勢の人に知ってもらうために森と水の源流館では「川上七木」の名前を当てるクイズをしています。漢字では杉、檜、榎、樅、松、高野槇と記述します。

ちなみに江戸時代尾張藩が木曾美林からの流出を規制したことで有名な木曾五木「ヒノキ、サワラ、アスナロ、クサヤ、コウヤマキ」があります。当時、尾張藩御用材以外の伐採が禁止され、「檜一本首一つ」と言い、盗伐した者は首切り処せられたと伝えられています。当時の考え方も森や水を守るための林政改革であったと思われる。また高野六木（こしやろくぼく）「スギ、ヒノキ、コウヤマキ、モミ、ツガ、アカマツ」の高野六木留山制度もあり、特別な場合を除いてはむやみに伐採することを厳に戒められていました。

このように、大昔から森林環境を守ることは実行されてきました。今、改めて言うことではありませんが、「川上七木」の名前においても、「吉野川源流―水源地の森」は永久に保全を誓います。

（広報かわかみ2007年3月号より転載）

ヒノキ（ヒノキ科）

Chamaecyparis obtusa

吉野地方産のヒノキは、スギと同じく吉野檜として名高い。

古くから日本人の生活と結びつきが深く、スギとともに建築材として最も広く利用されている。園芸品種も多い。高さは普通20-30m、大きいものは高さ50m、直径2.5mになる。枝は細く、水平に広がって密な卵形の樹冠になる。樹皮は赤褐色で、やや幅広く縦に裂けてはがれる。葉は鱗片状で交互に対生し、先は鈍い。裏面は上下左右の葉が接するところに白い気孔線があり、Y字形に見える。花は4月に開く。雌雄同株。雄花は長さ2-3mmの広楕円形で紫褐色。雌花は直径3-5mmの球形。球果は直径8-12mmのほぼ球形で、10～11月に成熟すると赤褐色になる。種子は卵形で両側に翼がある。



やや乾燥に強く、沢沿いのスギに対して斜面上部に植えられる。

古来、棒をもんで火を起こす際、火切り板として用いられたので「火の木」から名を得たという。



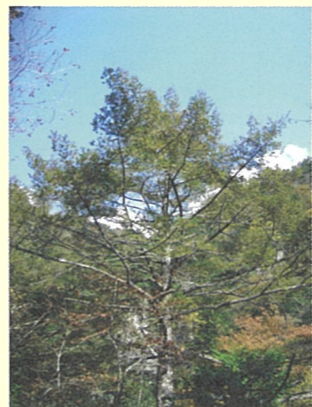
トガサワラ（マツ科）

Pseudotsuga japonica

この樹木は、世界でも高知県東部と紀伊半島中南部の標高500～800mの山地のみ自生が知られるマツ科の針葉樹である。1895年に東京大学の白沢保美博士が紀伊山



中で発見し、ツガ属の一種（学名：*Tsuga japonica*）として発表した。その後ドイツのBersnerがトガサワラ属とした。トガサワラの属名 *Pseudotsuga* は「偽物のツガ」、「ツガもどき」といった意味である。和名はツガ（トガ）のように樹皮が剥けるが、材はヒノキ科のサワラに似ているところから付けられている。また、川上村では古くから明るく乾いたところに生育する性質から「カワキ」「カワキトガ」の名で呼ばれ、「吉野松」の名で市場にも出ているという。



日本特産種で、普通高さ20-30m、大きいものは高さ40m、直径1.5mになる。樹皮は赤褐色で厚く、老木では灰褐色になり、縦に薄くはがれる。樹冠は広円錐形。葉は長さ2-2.5cmで、裏面は白い。花期は4月頃。球果は長さ4-6cmの卵形または円柱状卵形。10月頃成熟して黒紫色になり、白粉をかぶる。苞鱗は種鱗より長くつきだし、先端は3裂する。

「三之公トガサワラ原始林」は216,666m²が昭和4年12月17日に国指定天然記念物に指定されている（文部省告示第370号）。指定理由としては『とがさわらは、大和紀伊及四国の一部にのみ産する松柏科の樹木にして「三之公」峡谷に於ける該樹の原始林は、この林相の壮大なる点に於て代表的なり』とされている。

トガサワラ属はかつて、北半球に広く分布していたことが化石証拠から分かっており、現在は分布しないヨーロッパでも、古くは新生代第3紀（約6,500万年前～約200万年前）の地層から発見されている。日本からもメタセコイアの発見で高名な三木茂博士により *Pseudotsuga subrotunda*、*Pseudotsuga gondylo carpa* の2種が化石種として発見、報告されている。そのような観点から「生きた化石植物」ともいわれる。

日本のトガサワラは現在では残存的で繁殖力も弱く分布も限られている。ところが、北米西部には近縁種のベイマツ（英名：Douglas fir; 学名：*Pseudotsuga menziesii*）があり、主要木材として日本にも輸入されている。他には中国、台湾にトガサワラ属が生育するが、日本同様わずかである。ヨーロッパではベイマツを林業のため、導入することに成功しているが、日本では樹齢15-20年ほどで樹盛が衰えて失敗したということである。

現在、トガサワラの生育地が限られている要因として、進化とともに勢力を拡大した落葉広葉樹、常緑広葉樹との生育地争いに敗れたとされるのが有力である。トガサワラは林冠を広葉樹でふさがれてしまうと種子の発芽に日光を必要とするようで、現在も稚樹更新は日光の当たりやすくなった場所（急傾斜地、尾根筋、伐採跡地など）でより高い数値を示すことが報告されている。一方、北米西部のベイマツの繁栄は生育地を争う広葉樹の進出が限られたことが原因であると考えられている。



トガサワラは環境省のレッドデータブックでは絶滅危惧II類に指定されており、100年後の絶滅確率は90%と予測されている。さらに保護に必要な生態調査も十分行われてきたとは言いがたいのが現状であり、生育地での積極的な保全対策が求められている。川上村ではまだまだ奥山を中心に自生地が点々と見られる。この貴重な自然財産を次代に残していきたいものである。

スギ（スギ科）

Cryptomeria japonica

日本特産で、各地に広く自生し、また有用樹種として最も多く植林されている。日本では最も大きく、長寿の木といわれ、屋久島には樹齢約3,000年を越えるものがある。大きいものは高さ65m、直径6.5mに達する。樹冠は楕円状円錐形で、老木になると丸くなる。樹皮は赤褐色で縦に長く裂ける。葉は小形の鎌状針形で螺旋状につく。4月頃開花する。雄花は前年枝の先に多数つき、淡黄色で楕円形。雌花は前年枝の先に1個つき、緑色で球状。球果は長さ2-3mmの卵状球形で10月頃成熟する。

日本海側の多雪地帯に適応した形態を持つ変種にアシウスギがあり、林業的には基本変種のオモテスギに対しウラスギの名で知られる。生育適地が異なるため植林の際には注意が必要とされる。

川上村では、文亀年間（1501 - 04年）に桜井市三輪山、奈良市春日山に生育する杉の苗木を移植したのが最初と言われ、その後江戸時代中期に屋久島のスギを移入して品種の改良を図ったとされている。当地は、スギの生育に適した気候・土壌を有し、多く植林され、独特の施行方法を確立させ、吉野杉として名高い。吉野杉は多密植多間伐のため、年輪の幅が狭く均等なものになる。

酒とスギとの関係も深く、三輪明神の助けで一夜にして美酒をかもしたという伝承から、酒屋では杉葉を束ねた杉玉を軒につるして看板としたり、杉の香りを尊んで酒樽を作ったりした。

